



第3章

校内研修活性化のポイントに 沿った具体的実践

長崎県教育センター

校内研修活性化のためのポイントに沿った検証

長崎県教育センターでは、小学校2校、中学校2校、特別支援学校3校の研究協力校とともに、本手引き書の第1、2章（理論編）で提案している「校内研修活性化のための五つのポイント」に沿った実践研究を2年間にわたって進めてきました。大規模校、小規模校、それぞれの特長を生かした校内研修の推進、校内に高い専門性をもつ職員が在籍している状況、様々な年齢層の職員で構成されている学校の状況を生かした校内研修の運営など、各研究協力校の特長、強みを生かした研究を行い、その成果について検証しました。皆さんの学校の実態や状況に応じて、第3章「実践編」をお読みいただき、必要とする情報の検索を行ってください。

1 研修過程を充実する

「学力調査を活用した学校改善・授業改善に有効なプランは？」

少人数の職員、少人数の児童、小規模校の特長を生かした課題の洗い出し

西海市立西海北小学校 第3章9ページ参照

学校改善・授業改善プランの有効性の追究は、課題の具体的分析から始まります。学力調査の結果や独自のアンケート調査等から課題を具体的に分析することが有効なプランづくりの第一歩です。

「年間を通じた研修の各過程で職員の研修意欲や課題意識を高めるには？」

職員間の合意形成を図る研修過程の工夫と充実

長崎県立ろう学校佐世保分校 第3章33ページ参照

全職員が研究の目的、達成のための手法、最終的なゴールの姿を、研究の各過程で確認し合い、協働して次なる改善に向かえるように、研修過程の工夫と充実を図ることが必要になります。

2 教育資源を積極的に活用する

「職員一人一人の専門性を引き出すには？」

内部講師を効果的に活用し、職員一人一人の専門性を引き出す研修

長崎県立盲学校 第3章27ページ参照

職員の必要感の高い研修テーマの設定や内部講師の活用、また、職員の特長を生かして各研究部の部員を構成することで、職員一人一人の専門性を引き出すことができます。

「自校の実態や状況から研究の具体を構想するには？」

内部講師の講義による研究内容の理解促進

長崎県立ろう学校佐世保分校 第3章33ページ参照

研究テーマについて共通理解を図り、研究の具体を構想し見通しをもつためには、研究開始時に校内職員が講師を務め、自校の実態や状況と研究テーマを重ね合わせて研修を深めると効果的です。

3 SGAを生かして組織力を高める

「教科部会や研究部会と全体会を効果的につなぐには？」

全教科共通の課題把握を出発点とした大人数の職員による協働研究

大村市立郡中学校 第3章15ページ参照

各グループで協議した内容に共通点が見出される中で研究の課題が明確になります。各部会の協議内容を開き合い、共通点を見出して、みんなで取り組むことを明らかにすることが大切です。

「教科の壁を越えて互いの授業を磨き合うには？」

授業の視点を定め、教科の壁を越えて磨き合う授業研究会

東彼杵町立千綿中学校 第3章21ページ参照

中学校で他の教科の授業研究会に積極的に参加し意見交換を活発に行うためには、全教科に共通する授業検証の視点を定め、視点に沿って授業研究会を行うことで授業を磨き合うことができます。

4 参画型研修で協働意識を高める

「全職員が自分の役割を自覚し、協働意識を高めていくには？」

職員一人一人の当事者意識が高まるワークショップ型研修

松浦市立福島小学校 第3章3ページ参照

様々な年齢層の職員が混在したチームを編制し、多様な意見や考えを出し合うなかで、職員一人一人が自分の役割を見出し、共に動こうとする協働意識が高まります。

「授業研究会を効果的に運営するには？」

大規模校の強みを発揮するグループ研究やワークショップ型研修の効果的実施

長崎県立佐世保特別支援学校 第3章39ページ参照

限られた時間の中で、より多くの職員が意見を出し合い、多種多様な意見が交わされるには、グループ協議の視点を明確にし、各グループの協議内容を効果的に開き合うことが大切です。

5 成果を可視化し、課題を共有する

「児童・生徒の変容から職員の研修意欲を高めていくには？」

国や県の学力調査と学校の独自調査を連動させた課題改善の分析と成果の可視化

松浦市立福島小学校 第3章3ページ参照

職員の研修意欲の高まりは、何と言っても児童・生徒の成長にあります。国や県の学力調査と併せて、学校独自調査の結果分析を定期的に行うなど、児童・生徒の成長が実感できるものがが必要です。

「授業改善の状況をどうやって確かめるの？」

改善の状況を確かめる評価問題の工夫と定期的な改善状況の点検

西海市立西海北小学校 第3章9ページ参照

一つの課題を様々な角度から確かめられる評価問題を作り、同じ課題の評価問題を時期をずらして何度も実施することで、研究の成果について可視化することができます。

次のページからは研究協力校の具体的実践です。各学校は五つのポイントの中から取組の重点を定め、実践研究を行っています。

学校の実態や状況に合わせて、重点ポイントを定めることも、校内研修の活性化を図るための大切なポイントです。



専門性の高い職員、教育資源を活用した 校内研修の活性化

長崎県立盲学校

<校内研修活性化のためのポイント>

②教育資源を積極的に活用する

1 校内研修活性化における研究テーマの設定理由

(1) 本校を取り巻く環境について

本校においては、児童生徒数の減少・実態の多様化、重度重複化が進んでいる。一方で視覚に障害のある児童生徒が地域の幼稚園や保育所、学校へ通園・就学する事例が増加している。県内唯一の視覚障害教育の専門機関である本校は、地域におけるセンター的役割も求められている。以上のことから、本校における視覚障害教育の専門性の維持・向上及び継承は重要な課題となっている。

(2) 専門部について

本校には、視覚障害教育に関して高い専門性を有する職員が在籍している。平成14年度より、これら高い専門性を有する職員を核とした、点字、歩行、ロービジョン、パソコン、福祉情報の五つの専門部（以下、5専門部）を組織している。全教職員が5専門部に分かれて所属し、全体職員研修の企画・立案・実施、さらには授業における助言等を行っている。

全体研修では、職員のニーズに応じたテーマの設定が課題として挙げられている。

一方、授業支援では、個別の教育支援計画策定や個別の指導計画作成、指導内容の立案において専門部が有効に機能していない現状がある。専門部がもつ専門性と、各担任・児童生徒の抱える教育的ニーズを十分関連させることが現在の課題である。

以上の課題を改善するため、全体職員研修、ケース会議等を通じて、校内の教育資源である専門部の知識や指導技術を継承し、職員の専門性の向上、児童生徒への的確な支援につなげる取組を行った。

2 校内研修の歩み

(1) 校内研修活性化のためのRV-PDCAサイクル

※ 専門部が携わったこと 各部等を中心としたケース会で行ったこと

月	H26	H27	研修内容 留意点	校内研修活性化のためのポイント
11月 12月	R V		職員の専門性の把握 セルフチェックシートの実施・集計・結果の分析を行い、今年度までの研修成果と課題を明らかにする。	①研修過程を充実する

1 月 2 月		指導の成果と課題の共通理解 個別の教育支援計画・指導計画をもとに児童生徒の成長と今後の課題を共通理解する。	①研修過程を充実する
4 月	P	全体研修会 全教職員に対し今年度の校内研修の目的や方法を研修部が提示し、共通理解を図る。	①研修過程を充実する
5 月	D	専門部研修[1]～[4] 新転任者研修に向けて、視覚障害教育に関する基礎的な研修を実施するため、昨年度の反省を踏まえ理解しやすい研修となるよう専門性の高い教員を中心に計画する。 昨年の反省をもとに、セルフチェックシートの再検討を行う。	②教育資源を積極的に活用する 5 専門部に在籍する専門性の高い教員を中心に計画立案を行う。 研修の実施に当たっては、専門性の高い教員と部員がペアとなったり、部員が講師となって専門性の高い教員がサポートする研修を行ったりすることで、部内の専門性継承が図られるよう、計画準備を行った。
6 月		27年度新転任者講習の実施 ケース会の実施[1] 各学部で児童生徒の実態、年間目標の共通理解を、担任を中心として行う。各教科等で年間目標達成のために行う具体的方策、共通する支援や手立て・配慮点などを共通理解する。	②教育資源を積極的に活用する 支援方法や授業の指導内容、手立てなど必要に応じて該当する専門部が助言等の支援を行う。
7 月		授業実践 共通理解した具体的な方策や手立てについて授業実践を行う。	
8 月		専門部研修[5]～[10] 再検討し実施したセルフチェックシートの集計結果を分析し、昨年度の分析結果も踏まえながら2学期に実施する全体職員研修を企画・立案する。 各学部から依頼された援助内容を検討し、指導法等を助言する。	②教育資源を積極的に活用する セルフチェックシートの分析結果から全体職員研修で行う研修内容を企画・立案する。また、企画した研修内容を部内研修で事前に行う。

9月10月11月		ケース会の実施[2] 1学期の授業実践の評価を行い、児童生徒の長期目標を達成するための改善策について共通理解を図る。	②教育資源を積極的に活用する 中学部のケース会のメンバーに専門性の高い教員や寄宿舎指導員を加え、それぞれの立場で意見・助言を行う。 ④参画型で協働意識を高める KJ法による意見集約を行う。
12月	C A	職員研修の実施 セルフチェックシートの分析・評価 研修内容に該当するセルフチェックシートの質問項目をアンケートとして提示し、研修前と研修後の成果と課題の検証を行う。	②教育資源を積極的に活用する 専門性の高い職員が他の部員をサポートしながら、それぞれに全体職員研修の中で役割を担う。
		研究授業・授業研究会 協議した手立て・配慮点を指導案に記載し授業を行う。	②教育資源を積極的に活用する 専門性の高い教員が手立ての有効性や改善点について助言する。 ④参画型で協働意識を高める マトリックス法を用いた授業研究会を行う。
1月2月	R V	ケース会の実施[3] 研究授業・授業研究での協議や授業実践、専門部からの助言、支援等を整理して、来年度の目標を設定し、指導計画を立てる。	
3月		専門部研修[11]～[13] 実施したアンケートをもとに取組の評価を行う。 来年度の新転任者講習及び全体職員研修の立案、セルフチェックシートの改善を図る。	

(2) 本校の特性を生かした校内研修活性化のポイントの設定理由

○教育資源を積極的に活用する【校内研修活性化のためのポイント②】

専門性の高い教員が5専門部に所属し、全体職員研修の企画・立案・実施に携わることで、専門部内での研修の活性化が図られる。また、児童生徒の支援や指導に対する助言を行うことで、各教員の児童

生徒への指導の力量形成が図られると考えた。専門性の高い教員がその力を発揮し、校内研修を活性化させるため、以下の取組を行った。

①セルフチェックシートの活用

教員の専門性を図るセルフチェックシート（図1）を実施・分析することで職員のニーズを把握し、効果的な全体職員研修が実施できると考えた。

②ケース会

各部で行うケース会に、専門性の高い教員が参画し、助言を行うことで協議を深め、個別の教育支援計画の修正及び個別の指導計画の評価・改善につながると考えた。

（3）実践の振り返り

①専門部の取組

ここでは5専門部のうち、ロービジョン部の取組（弱視レンズの操作に関する校内研修の取組）を紹介する。

弱視である児童生徒が学習や生活において身に付けておくべき力の一つとして、遠用弱視レンズ（単眼鏡）、近用弱視レンズ（ルーペ）の操作が挙げられる。弱視レンズの操作は、主に自立活動の時間において指導するが、教科学習においても板書を単眼鏡で見たり、ルーペを使ってノートに書いたりする際に用いるな

ど、自立活動と教科学習との関連が深い。弱視レンズ操作の指導に関する教職員の専門性の向上は、児童生徒の学習の理解を深めるとともに、盲学校のセンター的機能ともつながると考える。そこで、全体職員研修の内容として、自立活動の時間の指導と教科指導との関連が深い「遠用弱視レンズ（単眼鏡）の選定と指導法」「近用弱視レンズ（ルーペ）の選定と指導法」を実施した。

(1)	単眼鏡の持ち方、ピント合わせなど基本的操作	【質問1】
(2)	遠用弱視レンズ基本訓練プログラムによる単眼鏡使用訓練	【質問2】
(3)	遠用弱視レンズ応用訓練プログラムによる単眼鏡使用訓練	
(4)	広視野空間探索訓練プログラムによる単眼鏡使用訓練	【質問3】
(5)	近用弱視レンズの持ち方、ピント合わせなど基本的操作	【質問4】
(6)	近用弱視レンズ基本訓練プログラムによる使用訓練	【質問5】
(7)	近用弱視レンズ応用訓練プログラムによる使用訓練	
(8)	広視野空間探索訓練プログラムによる近用弱視レンズ使用訓練	【質問6】
(9)	据え置き型拡大読書器の操作法	
(10)	携帯型拡大読書器の操作法	

図1 セルフチェックシート（一部）
（○ は全体職員研修で実施した項目）

ア 専門性の高い教員によるロービジョン部内における研修

（ア）全体職員研修で使用予定であった資料や動画の検討

（イ）遠用弱視レンズ、近用弱視レンズを実際に使用した全体研修のデモンストレーション

以上の部内研修を実施することで、各部員が主担当をサポートして研修を進めることができるとともに、部員それぞれが自身のスキルアップにつなげることを目的とした。

イ 全体職員研修前後の教職員の意識の変容（アンケート結果より）

全体職員研修の内容に該当する質問は、教員の専門性を測る「セルフチェックシート」の「視覚補助具の選定、使用訓練」（全15問）のうち、○で示した6問である。（図1）

アンケートでは、「1 指導に活用できない」から「4 指導に活用できる」まで4段階で評価し、自己評価とした。下の全体職員研修前後のアンケート結果（図2）には、各質問項目について、参加者の自己評価の平均値を示している。研修前よりも研修後の方が平均値は高くなり、高い評価となった。

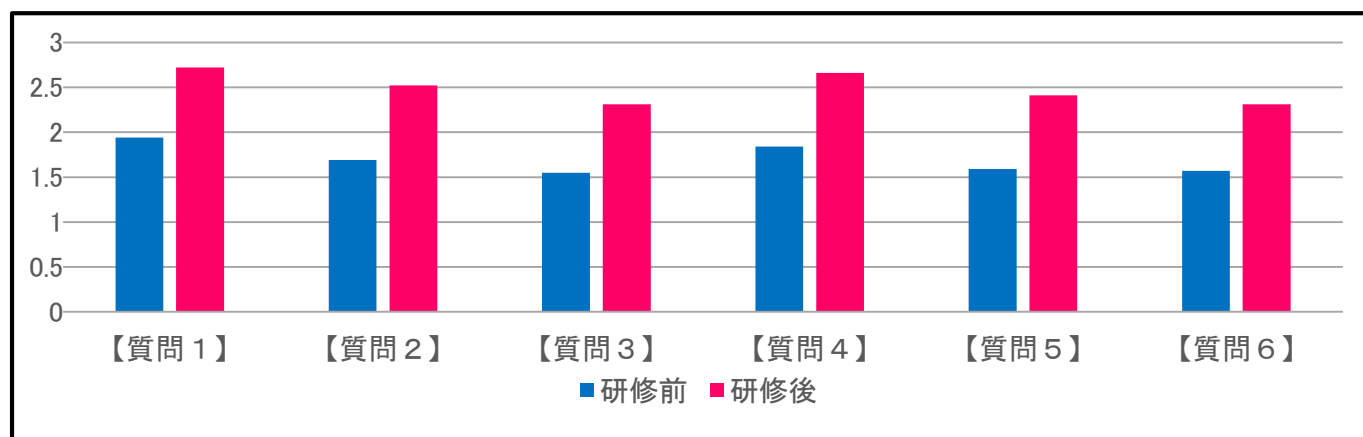


図2 全体職員研修前後のアンケート結果

※アンケートは、数字が大きいほど「指導に活用できる」と自己評価している。

グラフ内の【質問1】～【質問6】は図1参照

全体職員研修を実施するに当たっては、ロービジョン部全体で研修を企画運営することにより、ロービジョン部内のスキルアップを図ることができたとともに全体職員研修においても効果的な研修が実施できたことが図2から読み取れる。ただし、得られた知識や指導法を実際の指導場面に生かすことが今後の課題であり、授業支援等に対応することが必要となる。

②ケース会の取組

ここでは中学部のケース会を紹介する。実施は以下のように行った。

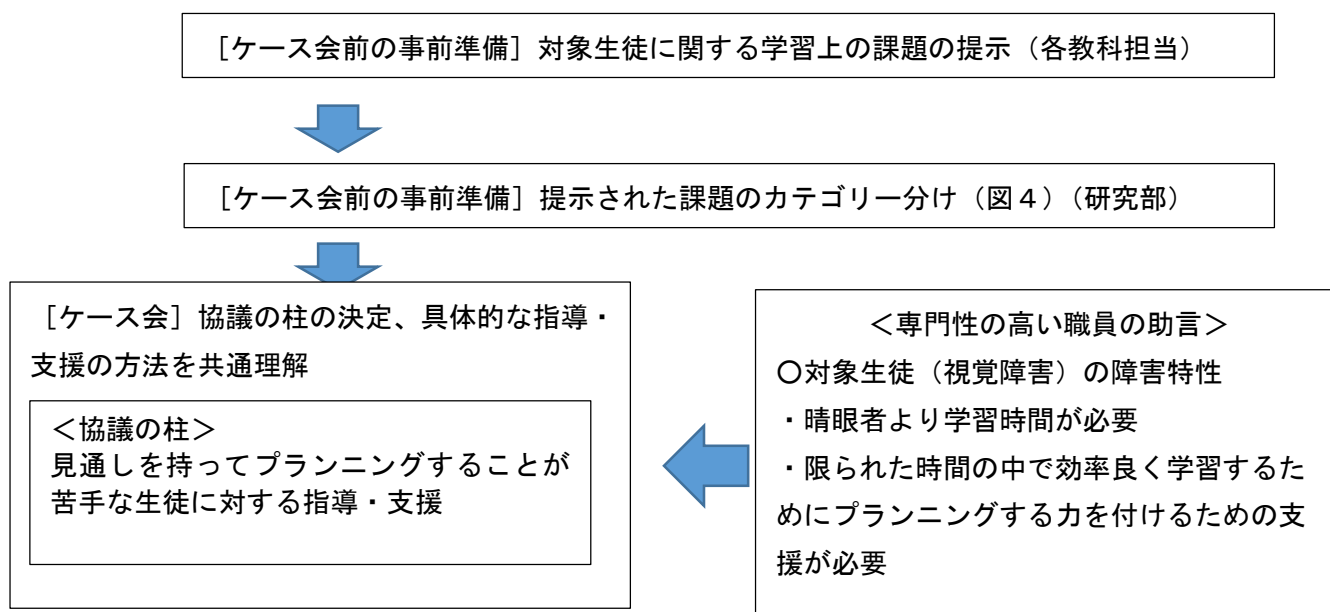


図3 ケース会の流れ

対象生徒が示す困難さや、各教科でこれまで行ってきた取組を可視化・共有し、課題への改善策を協議することを通して、対象生徒に対して各教科担当者が同じ手立てや配慮で指導していくことを共通理解できた。ケース会の中では、専門性の高い教員から、対象生徒の見え方の状態や視覚障害の障害特性に関する助言があり、それらを参考にして、対象生徒に対する具体的な取組をとりまとめ、実践に移すことができた。

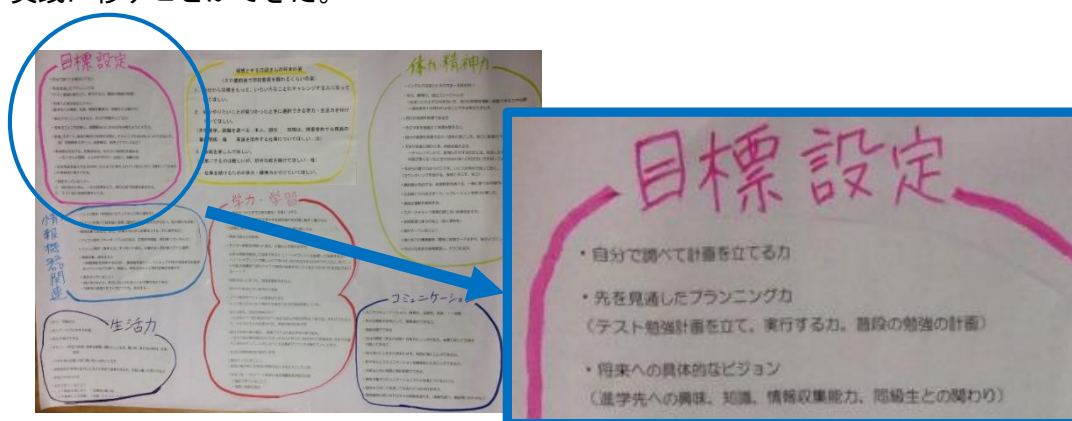


図4 提示された課題のカテゴリー分け

(4) 実践研究のまとめ

校内資源である専門性の高い職員を積極的に活用して、視覚障害教育における専門性の維持、継承及び向上を目指した。今回の取組を以下のようにまとめたい。

	成 果	課 題
と 専門部が携わったこと	○全体職員研修後のアンケート結果から、一定の効果が得られたことが確認された。 ○各専門部での部内研修を通して部員の知識、技能の向上を図り、全教職員へ還元するという道筋を立てることができた。	○得られた知識を実践に生かすために、アンケート等からさらにニーズを明らかにし、動画の使用や指導事例発表、体験型の研修など研修の実施方法を検討していく必要がある。
― 各部を中心としたケース会で行ったこと	○専門性の高い教員が部を超えて参画するという枠組みを作ることができた。 ○共通の課題に対し、各教員の意見を出し合ったり、専門性の高い教員から助言を受けたりすることで、教職員間で共通した具体的支援を行うことができた。	○開催時期や協議内容を精査し、年間計画を立てる必要がある。 ○限られた時間の中で協議の柱を明確にし、専門性の高い職員に求める助言等を絞り込む必要がある。

本研究を通して得られた成果と課題をもとに、今後もRV-PDCAのサイクルに沿って校内研修を企画・運営していくことが、視覚障害教育における専門性の維持・向上及び継承を達成していくことにつながると思う。



「現状」「方向性」「成果」を共有しながら進める 校内研修の在り方

長崎県立ろう学校佐世保分校

<校内研修活性化のためのポイント>

①研修課程を充実する

1 校内研修活性化における研究テーマの設定理由

本校の教職員は、半数以上が20～30代で、全体の約3割は講師である。若手の教職員が多く、知識や経験の差が大きい。教職員数が少ないため、これまでも少人数編成での研究会を実施してきており、研究への参画意識はそれほど低くはない。ただし、前述のとおり、専門性の差から研究会では一部の教職員が発言する状況になることが多い。

また、平成26年度から「キャリア教育」の研究に取り組むことになったが、「キャリア教育」とは何かを理解する段階にあり、こういった取組を行っていくのか、研究と日々の授業実践がどのようにつながっていくのかをイメージできていない教職員もいる。

このような本校の特性を踏まえ、校内研究の道筋について職員間の合意形成を図り、全教職員が見通しを持ち、それぞれの持ち味（経験や専門性）を生かしながら校内研究にかかわっていくことを目指して、校内研修活性化のためのポイント「①研修過程を充実する」に重点を当てて、取り組むことにした。

2 校内研修の歩み

(1) 校内研修活性化のためのRV-PDCAサイクル

月	H26	H27	研修内容 留意点	校内研修活性化のためのポイント
7月	P		研究テーマ及び方向性の共有 全体研究会において、研究テーマ及びテーマの設定理由、研究のねらいと方法について提示する。	①研修過程を充実する 校内講師によるキャリア教育の概要について学ぶ研修会を実施した。
	D		研究テーマの理解を促すための研修会の実施 研究で取り組んでいく「キャリア教育」とは、どんなものか全教職員に共通理解を図るための研修会を実施する。	

8 月	C A		研究のゴールを提示（ビジョンの提示） キャリア教育全体計画と発達段階表を作成することで、本校のキャリア教育推進の基盤を築くという研究の道筋を提示する。	①研修過程を充実する 他のろう学校のキャリア教育全体計画と岡山県特別支援教育キャリア教育の発達段階表（平成25年岡山県特別支援教育校長会作成）を参考資料として提示し、一年間でどのようなことに取り組み、成果として何を残すかを共有した。
			課題の整理（各学部） 本校の幼児児童生徒の課題をキャリア教育の視点で整理する。	①研修過程を充実する 本校の幼児児童生徒のキャリア教育に関連する課題を、KJ法により整理し、全教職員で共有した。
			ねらいの検討（各学部）【a】 課題をもとに、キャリア教育の具体的なねらいを各学部で整理する。	①研修過程を充実する 各学部で整理した課題を解決するために、どのような力を育てる必要があるか、キャリア教育の四つの能力ごとに整理した。
			ねらいの系統性の検討（全体）【b】 各学部で検討したねらいが一貫したものになっているか、系統立てられているかについて検討する。	各学部のねらいが出揃った段階で、全体で系統性を考える研究会を設定した。この際は、通常のグループ編成ではなく、経験や専門性の差などに配慮し、各学部の教職員を3グループに振り分け編成した。
2 月	R		ねらいの再検討（研修部→各学部）【c】	全体会後は、出された意見を研修部で整理し、それを各学部で再検討した。 ※【a→b→c】の流れを数回繰り返し、「キャリア教育発達段階表（平成26年度案）」を完成させた。
			1年次の研究の振り返りと次年度の課題の整理 一年間の研究成果と課題を整理する。	①研修過程を充実する 一年間の研究内容と校内研究の進め方に関するアンケートを実施した。
3 月	V	P	次年度に向けた課題の共有と研究計画の立案 研究報告会において、今年度の研究成果と課題を提示し、共有する。 課題に対する具体的方策について話し合	アンケートの結果より、「今年度の取組をどのように授業実践につなげるか」という課題が明らかになった。年度末の研修部会において、作成した「キャリア教育発達段階表」を授業（指導案）へつなげる道筋を検討した。

		う。(研修部)	
4月		一年間の研究計画について共有 全体研究会において、今年度重点的に取り組む内容とその具体的方策を提示する。	①研修過程を充実する 『「キャリア教育発達段階表」を生かした授業づくり』という今年度のテーマを共有した。「キャリア教育発達段階表」と「キャリア教育ねらいシート」「学習指導案例」を提示し、どのように授業づくりにつなげるかを提案した。
		キャリア教育推進に関するアンケートの実施 「キャリア教育推進アンケート」を実施し、キャリア教育に対する意識について調査する。	①研修過程を充実する 「キャリア教育の視点を取り入れた授業づくり」を行うに当たり、キャリア教育の取組に対する意識や取組の現状を把握するため、全教職員を対象にアンケートを実施した。
5月	D	個別の課題の明確化 キャリア教育のねらい(個別)を明確にし、第1回の研究授業を行う。	④参画型研修で協働意識を高める 授業研究会が深まらないという課題に対し、協議する内容と場面を絞ることにし、授業参観ミニカードを作成し、意見を書き込んでもらうようにした。
6月			
7月	C	授業研究会の在り方についての検討 研究テーマに基づき、授業研究会を深めるための具体的方策について話し合う。(研修部)	
8月		研究の進捗状況と今後の見通しの共有	①研修過程を充実する これまでの研究の流れと今後の研究の見通しについて、再度確認した。
9月	D	授業改善(一人一授業) 「キャリア教育の視点を取り入れた授業づくり」のテーマのもと、各学部で研究授業・授業研究会を実施する。	④参画型研修で協働意識を高める マトリックスシートの活用 授業参観をした各自の意見を付箋紙に書き出し、マトリックスシートを使って「教師の働きかけ」と「教材」の2点について、「成果」と「課題」に分けながら授業研究会を進めた。
10月	C	「キャリア教育発達段階表」の見直し 授業実践を行いながら、「キャリア教育発達段階表」の見直しを行う。	④参画型研修で協働意識を高める 全教職員が授業を参観し、授業研究会に参加した。学部ごとにグループを編成し、マトリックスシートを活用した協議を行った後、その内容を全体で共有した。

11月12月	A	さらなる授業改善（各学部代表研究授業） これまでの授業改善を受けて、各学部から1本ずつまとめの研究授業を実施する。 成果の検証 「キャリア教育推進アンケート」を再度実施し、教職員の意識の変容を考察する。	⑤成果を可視化し、課題を共有する 授業研究会のマトリックスシートを掲示し、全職員が協議内容を共有できるようにした。
1月			

(2) 本校の特性（魅力と課題等）を生かした校内研修活性化のポイントの設定理由

○研修過程を充実する【校内研修活性化のためのポイント①】

ア「キャリア教育全体計画」作成をゴールとした研究運営

「キャリア教育全体計画」を完成させることを研究のゴールとして、「キャリア教育発達段階表（平成26年度に作成）」「キャリア教育ねらいシート」（取り扱う視点を統一し、幼児児童生徒全員分作成）「学習指導案例」の三つを提示し、「キャリア教育全体計画」と授業実践とのつながりを具体的に提示した（図1）。

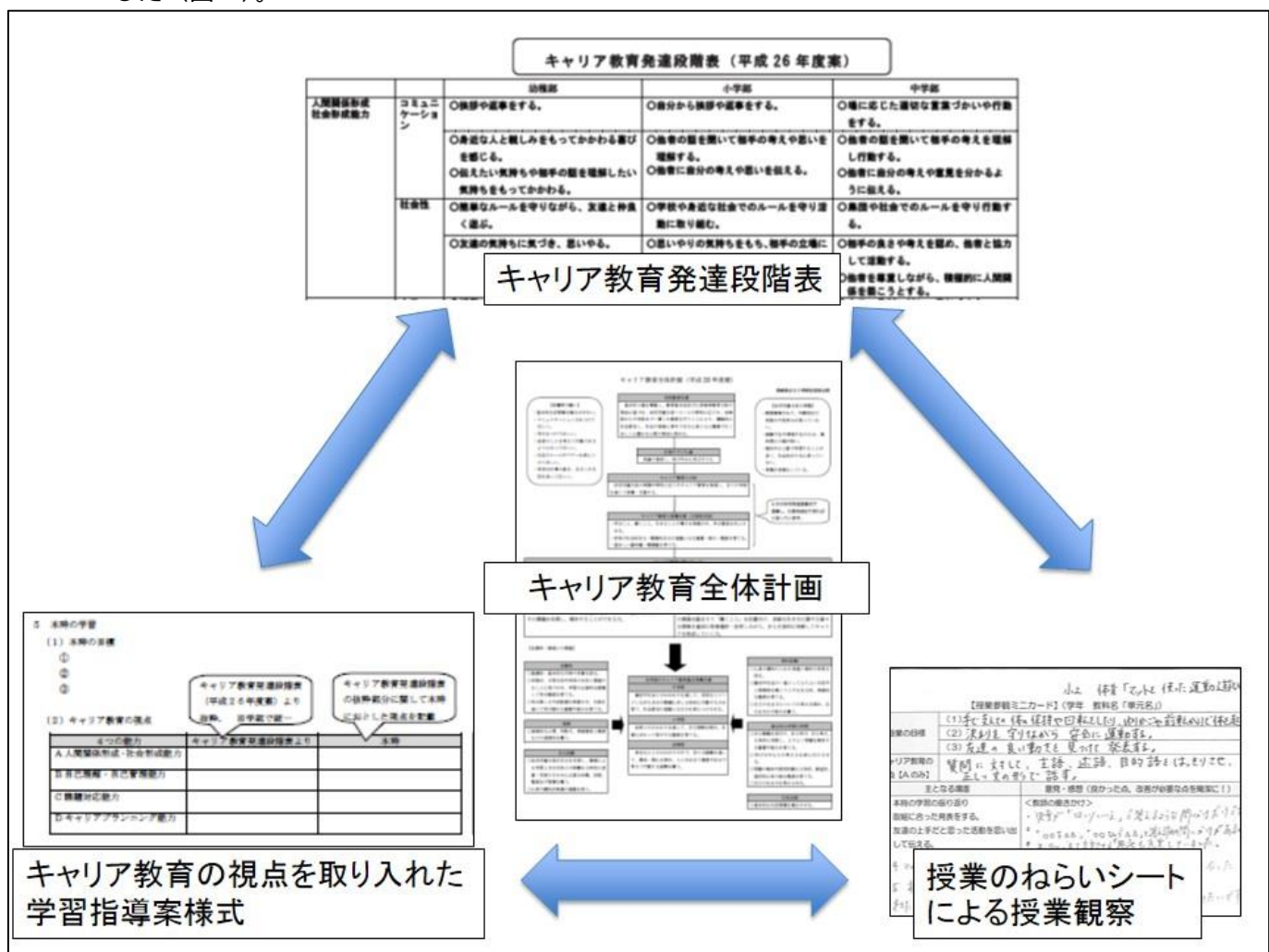


図1「キャリア教育全体計画」とのつながり

イ 「キャリア教育推進アンケート」を基にした調査

「キャリア教育推進アンケート」(図2)を実施することで、自分の課題を明確にするとともに、学校としての課題を把握し、今後の研究の見通しを立てたり、研究成果の検証をしたりにするために活用した。

【キャリア教育推進アンケート】				
◇当てはまる番号に○を付けて下さい。				
4：いつもしている 3：時々している 2：あまりしていない 1：ほとんどしていない				
評価項目	チェック			
各教科等の授業において、キャリア教育の視点を取り入れて授業を行っている。	4	3	2	1
幼児児童生徒の問題解決的な活動や体験的な活動の時間を十分に確保している。	4	3	2	1
幼児児童生徒が他者の話を最後まで聞いたり、他者に分かるように伝えたりできるように指導をしている。	4	3	2	1
幼児児童生徒が他者の気持ちを考えて行動するように配慮してかかわっている。	4	3	2	1
幼児児童生徒が自分の興味・関心、長所や短所などに気付けるように働きかけている。	4	3	2	1
幼児児童生徒が活動の見通しをもてるよう支援し、自主的で主体的な態度を育てている。	4	3	2	1
授業の最後に、学習したことをまとめる時間をとっている。	4	3	2	1

図2 キャリア教育推進アンケート

(3) 実践の振り返り

①全教職員が課題意識をもって取り組む校内研究

本校は「キャリア教育」の研究に取り組むことになったが、研究開始時、こういった取組を行っていくのか、研究と日々の授業実践がどのようにつながっていくのかをイメージできていない教職員が多かった。そこで、研究開始直後に、校内講師によるキャリア教育の概要について学ぶ研修会を実施した。また、他校の資料を参考資料として具体的に提示し、キャリア教育を進める上でどのように実践につなげていくか共通理解を図る研修会を実施した。このような研修会を実施していく中で、「キャリア教育全体計画」や「キャリア教育発達段階表」「キャリア教育ねらいシート」など、本校においてキャリア教育を進める上で必要な計画や様式等が全教職員において共通理解が図られていき、作成や活用がなされてきたと思われる。特に「キャリア教育発達段階表」の作成については、各学部において幼児児童生徒の課題をキャリア教育の視点で分析、整理し、さらに「キャリア教育発達段階表」のねらいとしてまとめたことにより、全教職員が共通した課題意識を持ち、研究授業・授業研究に取り組むことができた。

②「キャリア教育推進アンケート」の調査分析の有効活用

1回目の「キャリア教育推進アンケート」では、「各教科等の指導において、キャリア教育の視点を取り入れて授業を行っている。」の数値が低く、キャリア教育に対する全教職員の意識を高めていく必要性を感じた。そこで、キャリア教育の研究を進めていくに当たり、「キャリア教育の視点を取り入れた授業づくり」をテーマに設定し、授業づくりを中心に置くことで、研究と日々の授業をつなぎ、全教職員が課題意識をもって研究に参画できるのではないかと考えた。研究授業で着目するキャリア教育の視点については、どの教科でも必ず取り入れられるものを選び、今までも取り組んできたことをキャリア教育として意識して取り組ん

授業研究会の進め方について		
【授業研究会について】		
(1) 授業研究会の進め方について		
○授業研究会は、テーマを「人間関係形成・社会形成能力」に絞って実施する。 (理由)・子どもの実態として、この力に関する課題が大きいため。 ・35分の限られた時間で、協議を深めるため。		
○授業研究会の手順は以下のとおりとする。(①～④は研究会前、⑤、⑥は研究会時に関すること)		
①授業者は授業参観ミニカード(目標、キャリア教育の視点、主となる場面)を記入して、指導案と一緒に配付する。		
②参観者は、「主となる場面」について、参観しての気づきを「教師の働きかけ」>「教材」の観点で記入する。また、「主となる場面」以外のことは「全体を通して」>に記入する。		
③授業参観ミニカードは授業後、回収する。		
④回収した授業参観ミニカードは研修部が目を通し、記入してある内容を付箋紙に転記する。		
⑤授業研究会は、下記のように付箋紙を機軸紙に貼り付けながら協議を行う。		
⑥各授業において、本時の目標を達成するために、本時の目標と学習内容や手立て、キャリア教育の視点を関連付けて授業を行えたかについて検証する。		
	主となる場面	
	教師の働きかけ	教材
良かった点		
改善が必要な点		
改善策		

図3 授業研究会の進め方

でもらうことを重視した。また、授業づくりの方法については、全体研修会で「授業研究会の進め方」（図3）を提示し、具体的に説明を行った。

本校では研究会や授業研究会において、発言する人が限られることが多く、視点に沿った協議が深まらないという課題があった。そこで、研究会では知識や経験年数を考慮した小グループによる参画型の協議や、授業研究会にマトリックスシートを活用した参画型の研修を取り入れた（写真1）（図4）。さらに、授業研究会においては、限られた時間内に効率的に進めたり、キャリア教育の視点に沿った意見が出やすくしたりするために、協議する授業場面を絞ることにした。そして、その内容と場面に関しての「教師の働きかけ」と「教材」の2点について、「良かった点」と「改善が必要な点」を協議するようにした。上記の内容を記載した授業参観ミニカードを事前に配付して授業を参観してもらうことで、授業研究会への参画意識を高められるように工夫した。また、全体研修会では「改善が必要な点を指摘する際は代案を考えた上で指摘する」というルールを共有することで、経験の浅い教職員にも、「これなら次の授業で生かせるかもしれない」と感じてもらいながら研究を進めていくことができた。

③校内研修をさらに活性化させるために

小規模校という特性上、比較的合意形成は図りやすいが、全員でゴールを共有し、それに向かって取り組んでいくためには研修過程を充実させることが重要であった。また、その中でグループ編成や研究会の実施方法を工夫し、改善を重ねる必要があった。実践を振り返って、「評価」から「計画」までの過程の取組については十分でなかった。今後、具体的な研究計画をいかに立てるか、目に見える形でどのように評価を残していくかについて考えることが課題である。学校組織として、校内研究をさらに推進していけるように、二年間の反省をもとに考えていきたい。



写真1 参画型の研修

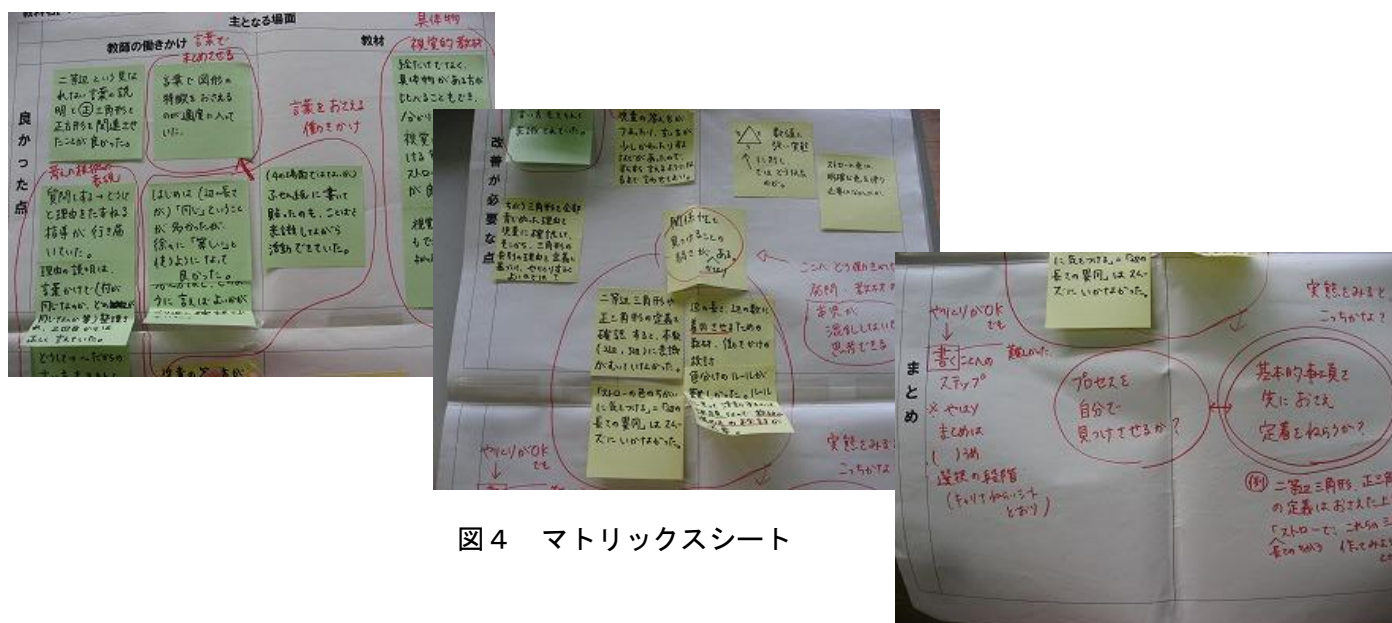


図4 マトリックスシート

ワークショップ型研修スタイルを積極的に活用した授業研究

長崎県立佐世保特別支援学校

<校内研修活性化のためのポイント>

③SGAを生かして組織力を高める ④参画型研修で協働意識を高める

1 校内研修活性化における研究テーマの設定理由

本校には知的障害教育部門と肢体不自由教育部門があり、肢体不自由教育部門では四つの教育課程（Ⅰ：小・中・高等学校に準ずる教育課程、Ⅱ：下学年・下学部代替の教育課程、Ⅲ：知的障害の特別支援学校の各教科に替えた教育課程、Ⅳ：自立活動を主とする教育課程）を編成している。

本校肢体不自由部門では、平成26年度、27年度の2年間、授業改善を全校研究テーマに掲げ、教育課程別や学部別などの五つのグループを編成し、グループごとに研究授業と授業研究を実施してきた。

これまでの授業研究は、従来型の授業研究会で行うことが多かった。そのため、積極的に発言する教員が少なく、毎回ほぼ決まった教員が意見を述べる事が多かった。また、十分な意見を交換したり、協議を深めたりすることが十分ではなかった。

そこで、多くの教員が自分の考えを出しやすいワークショップ型研修スタイルで授業研究を行い、参加者全員が共に学び合える授業研究を目指し、上記のテーマを設定し、授業研究をさらに活性化したいと考えた。

2 校内研修の歩み

(1) 校内研修活性化のためのRV-PDCAサイクル

月	H26	H27	研修内容 留意点	校内研修活性化のためのポイント
4月	P		2年間の見通しの確認 昨年度のRVを踏まえた上で、教育課程の各課程（Ⅰ～Ⅳ課程）ごとの課題を解決していくためのグループ研究を実施する。	③SGAを生かして組織力を高める 研究部において研究組織の編成、研究テーマの設定、年間計画の立案などを行い、研究推進委員会で提案した。
6月	D		改善策の実践（高等部の授業研究） 作業学習の授業研究における課題解決のための研究授業・授業研究を実施する。	④参画型研修で協働意識を高める マトリックス法 高等部Ⅲ課程の生徒一人一人における作業学習の在り方についての検討を行った。

2月	C	R	成果の検証① 各グループの1年間の取組の報告と課題・次年度の見通しを共通理解する。	④参画型研修で協働意識を高める KJ法による意見の収束 付箋紙に書かれていることを項目ごとにまとめ、意見の収束を図った。
4月	A	V	研究報告会の際、質問・意見・課題などを聞く。	
6月		P	1年間の見通しの確認 グループ研究の継続についての確認を行う。	④参画型研修で協働意識を高める 研究部から研究組織の編成、研究テーマの設定、年間計画の立案などを行い、研究推進委員会で提案した。
7月		D	授業研究についての評価 授業研究についてのアンケートを実施する。	授業研究についての意識調査 アンケートの結果をもとに、従来の授業研究会の課題を検討した。
9月			改善策の実践（研究授業・授業研究） 前年度の授業研究の反省を踏まえ、授業者の考えを聞き、授業研究で話し合うテーマを考える。 各課程の研究授業及び授業研究の実施。	④参画型研修で協働意識を高める 指導案、授業研究で話し合うテーマを提示した資料、付箋紙を配付し、研究授業のビデオを授業研究会の前に放映した上で、授業研究会に取り組んだ。 マトリックス法 6～9人のグループに分かれて、テーマに沿って意見交換を行った。 KJ法 授業研究後、マトリックスに貼られた付箋紙を各研究グループで項目ごとにカテゴリー分けし、改善点を整理した。
11月	C	A	成果の検証2 アンケートによる参画型の授業研究についての意見を把握する。	⑤成果を可視化し、課題を共有する 授業研究で出された意見をホワイトボードに書き出し、共通理解を図った。 授業研究についての意識調査 6月のアンケート結果と比較することにより、授業研究が活性化できたかを検証することができた。
1月		R	来年度の校内研究についてのアンケート	④参画型研修で協働意識を高める KJ法 今年度の成果と課題を踏まえて、教員から意見

2 月	V	<u>来年度の校内研究計画</u> 肢体不自由教育部門研究検討会において、次年度の研究計画を立案する。	を集約し、次年度の校内研究について検討した。 ③SGAを生かして組織力を高める 次年度の校内研究についての意見を集約した。次年度の研究内容の設定、研究組織の編成、研究テーマの設定について検討した。
--------	---	---	--

(2) 本校の特性（魅力と課題等）を生かした校内研修活性化のポイントの設定理由

○SGAを生かして組織力を高める【校内研修活性化のためのポイント③】

本部門は、教育課程が大きく三つに分かれており、それぞれの教育課程において、課題が多い。教育課程と学部を考慮し、五つの小グループに分かれ、それぞれの課題について研究を進めるようにした。小グループで話し合うことで、意見が出やすく、課題解決に向けてグループ全員で取り組んでいけるであろうと考えた。

○参画型研修で共同意識を高める【校内研修活性化のためのポイント④】

肢体不自由教育部門は、教員数が46名と多く、意見を出し合う場では、限られた教員が発言することが多い。そこで、多くの教員が自分の考えを発言しやすいワークショップ型で研究授業後の授業研究会を行うようにした。しかし、45分間という短い時間内で授業研究を進めていくことが難しいため、授業研究の事前・事後にも工夫を行うようにした。

(3) 実践の振り返り

IV課程小学部・中学部においては、「日常生活の指導」の授業について研究を昨年度から進めていた。そこで、今年度は、IV課程中学部グループの中で大きな検討課題であった「朝の会」について研究授業を行い、肢体不自由教育部門の全教員で授業研究を行うことにした。

①研究授業、授業研究の前に

ア 中学部グループ研究を進めている研究部員と研究主任で、協議のテーマや授業研究の進め方などを話し合った。これまでのグループ研究の経緯やグループの教員の考えや悩みも聞くことができた。

イ 中学部グループの教員と研究主任で、研究授業と授業研究について話し合いを行った。研究授業の際の注意点や授業研究のテーマや流れ、協議を行う班の編成なども、グループの教員の意向を聞きながら一緒に検討した。協議の際には、授業者も班の中に入ることにした。そして、協議のテーマを「実態が様々である10名の生徒が、個々の目標を達成できる『朝の会』ができていだろうか」とした。

ウ 研究授業の指導案や資料を配付するとともに、肢体不自由教育部門の全教員に研究主任と中学部グループ研究部員から研究授業と授業研究についてスライドで示しながら、以下の説明を行った。

スムーズに研究授業の参観と授業研究に全教職員が取り組むことができるよう、事前の説明会を設定し共通理解を図った。

- ・授業内容や指導案の見方に関すること
- ・授業研究の流れや協議のテーマ、班編成に関すること（班ごとに1～2人の児童生徒について、テーマに沿った事例検討を行うようにした）
- ・授業を参観できなかった教員のために、研究授業の録画ビデオを授業研究前に視聴できるようにすること
- ・付箋紙によって、成果と課題、改善策を書き分けること（「いいね」という意見をピンク、「～したらどうだろうか」を黄色）
- ・マトリックス表の説明等

②研究授業、授業研究当日

ア 研究授業を実施し、その後、録画したビデオの視聴を行う時間をとった（写真1）。研究授業を参観できなかった教員は、前日に授業を参観したり、録画ビデオを視聴したりしていた。授業を参観して、授業研究に臨もうという教員が多く見られた。

イ 授業研究を以下のような流れで実施した。

- ・授業者のコメント、参観者の付箋への記入（10分）
- ・各班で付箋の整理と意見交換（写真2、3）（15分）
- ・各班で出た意見の発表（写真4）（10分）
- ・全体での意見の共有（5分）
- ・指導・助言（5分）

写真1 録画ビデオの視聴



写真2 付箋紙の整理、意見交換



写真3 拡大指導案とマトリックス表

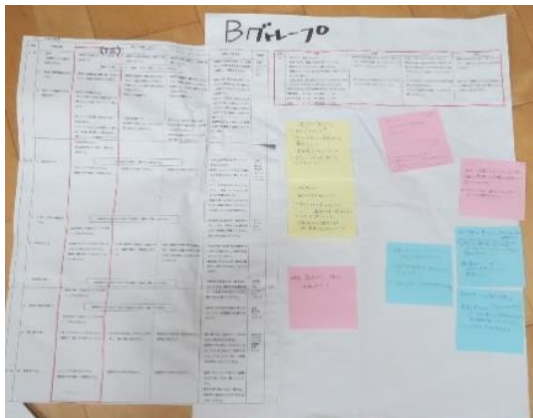


写真4 各班からの意見発表



③研究授業、授業研究の後に

授業研究の際に出た授業者と参観者の意見を、中学部グループ研究部員が下記の項目ごとにまとめたものをもとに、グループの教員で振り返った。検討課題であった集団での「朝の会」の在り方や学習活動などについて検討すること、また、児童生徒一人一人に応じた指導の改善策を考えることができた（図1）。

- ・生徒一人一人の目標達成にかかる学習活動や手立てなどの意見
 - ・他の教員の意見を聞いて感じたこと
 - ・協議内容がヒントになり、今後の教育活動に取り入れたいと思う活動や手立て
 - ・指導・助言を聞いて思ったこと
 - ・「朝の会」における集団学習に関すること
- 以上の意見を踏まえて改善策などを話し合った。

⑥Ⅳ課程朝の会の集団学習は？

- ・集団学習の意義をしっかりと教師側がもっていればよいと思う。「目覚めの一発！」今のⅣ課程の状態（登校の実態や個々の実態）を考慮したら、このままで良いと思う。人との関わりで自分以外のものに関心が向く効果が得られている中学部段階では横のつながり絆を深める意味として集団は必要に思う。
- ・他クラスの生徒の声や動きが刺激になり、覚醒する生徒や友達や担任以外の教師に気付き視線を向ける生徒など外界への意識が高まりつつあるので合同はありと思う。（活動の精選は必要であるが...）
- ・学校の教育活動自体、集団学習なので、効果的になるよう工夫すればお互いが高め合える学習ができると思う。
- ・生徒主体で考えるのであれば、クラス単位での実施は難しいと思う。1つの係だからこそ「出番」を感じられ、それが集まるから「朝の会」になるのではないかと思う。
- ・大集団の中で自分の役割を果たすことは、生徒の自信や人への関心につながると思う。また、周りの先生方の支援方法も見れて勉強になる。
- ・集団になれる。→社会になれる。

Bグループ（Kくん）

【いいね】

- ・黒のTシャツ
- ・子どもそれぞれが活躍する場
- ・教材の工夫
- ・見通しをもっていた。自分の番とすぐに気付いて得意そうな表情をしていた。
- ・長時間だが情緒が安定していた。
- ・Sくんに自分から手を出していた。
- ・積極的にスイッチをおしていた。

【課題】

- ・欠席が多いクラスということと友達の間わりがあってよい。
- ・時間割が異なるクラスを発表するのは？
- ・朝の歌はいつがいい？あえて後半になっている？曲の長さは？
- ・集団の中での個別の目標は？
- ・集団の大きさは多いように感じる。待ち時間が長い。
- ・メリットデメリットどちらもある。
- ・教師のつき方（立つ？座る？）
- ・出欠も含め、友達がいる、いないという友達への意識を目標・評価に入れなくていいのか？

【助言】

- ・時間割発表は各クラスでもいいのかも。
- ・朝の歌は始まりの意識をつけるためにも最初がいいのかも。
- ・友達への意識を目標に入れなくてもよい。むしろ小集団のほうが意識が確実に向けられる。
- ・対Dくんの呼名は横からより正面からのほうがよい。

自分が主役と認知し、長い時間の活動ができていた。横からの呼名はどうか？という意見。集団の朝の会について、友達への意識は目標、評価にいらないのか？幾つかの異なる時間割を伝える場合は、各クラスに分かれて取り組んでもよいのではないのか？Kくんのクラスは欠席が多いので、個の授業になりがちということと考えると集団の学習はよい。朝の会の順番や曲の長さは妥当か等の意見。

図1 グループ研究における資料

ア ワークショップ型の授業研究に取り組んだ教職員の感想

その後の授業研究もマトリックス法で繰り返し行った。そうすることで、2回目以降は授業研究の流れや方法の説明を省略することができた。また、回を重ねるごとに自然に意見が交わされるようになった。さらに、経験が浅い若い教員も発言する様子が見られるなど、多くの教員が授業研究に積極的に参加できた様子であった。11月に実施したワークショップ型の授業研究についての意識調査の結果にも「少人数での協議だったため、意見を言いやすい雰囲気であった」「個々人の意見が出しやすく、みんなが参加できる授業研究会だった」という声が聞かれた。

イ ワークショップ型の成果

○児童生徒の変容

授業研究で多くの教員の意見を聞くことができ、それを、グループで検討し、改善策を協議していった。教員の支援の仕方（声かけや反応を待つ姿勢など）、授業の組立て、実態に応じた教材研究などを検討し、授業改善を行っていった。そうすることで、児童生徒にも変容が見られた。グループ以外の教員から出てきた課題を改善していったり、いろいろなアイデアを生かしていったりすることで、グループの教員だけでは気付かなかったことにも視点を当てることができ、それが授業改善、児童生徒の変容へとつながった。

○授業研究を効率的に行うための教職員の参画意識の向上

45分という短い時間で授業研究を効率的、効果的に進めていくために、以下の工夫を行った。このことで教職員の参画意識が向上した。

- ・ 事前に指導案と一緒に、授業を見てほしい視点、授業研究のテーマ、授業研究の流れや方法などの資料を事前に配付し、それを踏まえて授業研究に取り組んでもらうようにしたこと
- ・ 付箋紙も指導案などと一緒に配付し、気付いたことは記録してもらうようにしたこと
- ・ 毎回、研究授業の録画ビデオを放映したこと

④課題

課題として、以下のようなことが挙げられる。今後、研究部で改善策を考え、次年度の授業研究に生かすようにしていきたい。

- ・ 45分間なので、協議を深めるポイントを絞って、事前に記入してくるようになるなど、参加者の事前準備が必要である。
- ・ 各班での協議の時間が短く、話が盛り上がっている途中で終了となり、もう少し時間がほしかったという声が聞かれた。設定された時間の中で協議等を活性化し、目的を達成できるような研修の在り方をさらに検討していく必要がある。

校内研修の手引き～実践編～

校内研修活性化のためのポイントに沿った具体的実践

平成 2 8 年 3 月発行

編集・発行 長崎県教育センター

〒856-0834 大村市玖島一丁目 24-2

TEL 0957-53-1186（企画課）
